知覚動詞補文の do 形と doing 形の使い分けについて

－知覚主体の心的態度の観点から－

尾　野　治　彦

0. はじめに

知覚動詞補文における原形不定詞（以下 do 形とする）と現在分詞（以下 doing 形とする）の意味の違いについては、Alexander (1988), Allsop (1983), Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999[2]), Chalker (1984), Declerck (1991), Kirsner and Thompson (1976), Palmer (1974[2]), Pizer (1994), Swan (1995), Thomson and Martinet (1986[4]), Zandvoort (1975[7]) といった文法書や論文、その他多くの辞書でふれられているが、ほぼ共通した見解が採用されている。ここではその一つの例として次の Alexander (1988) をあげておく。

(1) The bare infinitive generally refers to the complete action:

I watched a pavement-artist draw a portrait in crayons.

(i. e. probably from start to finish)

The *-ing* form generally refers to an action in progress:

I watched a pavement-artist drawing a portrait in crayons.

(i. e. the action was probably in progress when I arrived)

(Alexander 1988: 302)

このように、知覚動詞補文におけるdo形とdoing形の違いが、事態の始めから終わりまでを表す「完結」と事態の途中の一部を表す「非完結」にあるとする見解は、一見この違いの本質的な特徴を捉えているようにも思え、do形とdoing形の意味の違いを説明する定説となっている感がある[1]。(以下この説を完結説とする。)そのためか完結説では説明しきれない事象の存在が正面きって問題になることはこれまであまりなかったように思われる。

しかし、事実は、完結説では説明しきれないような事象は存在するのであり、このような事象は完結説の例外として扱われるべき性質のものではなく、逆に、コンテクストを考慮に入れなかった完結説そのものの不備を示す例になりうるものである。本稿では結論として、定説となっている完結説は、do形とdoing形の本質的な違いを捉えたものではなく、do形とdoing形は、「知覚」と「認識」という知覚主体の異なった心的態度の表れであることを示す。

本稿の構成は次の通りである。まず、最初の第1節では従来の完結説の問題点があげられる。ここでは、従来の完結説では説明できない、do形とdoing形の例が示されるが、特に、これまで気づかれなかった聴覚を表す知覚動詞の興味深い例が示される。また、do形あるいはdoing形のどちらか一方しか生起できない文については、Vendler (1967) や Pizer (1994) の完結説に基づく時間的整合性の観点から説明されてきたが、本稿では、これらの説が批判的に検討される。次の第2節では、進行形についての山岡 (1997) の見解を参考にしつつ、従来の完結説の代案として「純粋知覚」・「認識的知覚」という新たな説が提案され、この観点から具体例におけるdo形とdoing形の使い分けが論じられる。また、do形しか

とることのできない知覚構文の本質については、新獲得情報をとり入れるプロセスについて論じた Akatsuka (1985) の仮説との関連性が示される。第 3 節では、do 形と doing 形の対比が同じ補文動詞の場合について論じられる。第 4 節は、補文動詞が状態動詞の場合には、なぜ doing 形しかとれないのかを「認識的知覚」の観点から論じる。第 5 節はまとめである。

1. 完結説とその問題点

完結説にはいくつか問題があるが、大きくに三つに分けられると思われる。まずは、do 形が完結を表さず、逆に doing 形が一部でなく全体を表すと考えられる場合、二つ目は do 形と doing 例の意味の違いを知覚対象の完結、非完結と捉えることにほとんど意味がないと思われる場合、三つ目は、do 形と doing 形のどちらか一方しかとれない構文において、なぜ他方の doing 形あるいは do 形が生じないのかについて完結説では納得のいくような説明ができない場合である。

1.1. do 形が完結を表さない場合

まず do 形は完結を表すという完結説の当然ともいえる主張についてであるが、次の例において do 形は完結を表しているとは考えられない。

(2) a. Her musings were interrupted. There was a flurry of activity over at the mosque entrance, and Jane turned around to *see* Ellis *walk* in carrying something in his arms.

(K. Follett, *Lie down with Lions*)

b. "He left the village early this morning. Abdul *saw* him *go* north." (*ibid.*)

c. They were both still hungry from their adventure. Valdir sipped coffee, smoked his cigarettes, and *watched* them *eat*.

(J. Grisham, *The Testament*)

d. *Look at* him *run!* (Bolinger 1974: 66)

これらで用いられている、walk, go, eat, run といった動詞は Vendler (1967) のいう activity verb であり、その動詞の性質上、動作の完了は表しえないといえる。例えば（2a）の例では、「振り向くと歩くのが見えた」というコンテクストから、walk という動作は知覚行為の開始以前にすでに生じていたとする解釈は十分可能である。結局、これらの activity verb の do 形においては、始まりも終わりも含む出来事全体を表す必要はないということになる。よって、動作動詞については do 形は出来事の完結を表すとする完結説の例外として扱わざるをえず、これは無視することのできない完結説の大きな問題点であるということになる。

では、cross the street のような accomplishment verb の場合はすべて完結を表すのだろうか。次の例を見てみよう。

(3) She was parked at the curb, with the motor running. She *watched* Walter Manning *cross the street*, headed for the garage where he kept his car. She put the car in gear and slammed her foot down on the accelerator. At the last moment, he heard the sound of the car coming toward him, and he turned. She watched the expression on his face as the car smashed into him and then hurled his broken body aside. She kept driving. There were no witnesses. God was on her side.

(S. Sheldon, *Tell Me Your Dreams*)

この例で問題となるのは、She *watched* Walter Manning *cross the street*, の個所であるが、ここだけを読めば、Walter Manning は通りを横切った

ようにも思える。しかし、すぐ後を読めばわかるように、道路を横切っている途中に轢き殺されたのであって、cross the street のような達成動詞も完結を表しえない場合があるということになる。

1. 2. doing 形が完結を表す場合

1. 1. 節では、do 形が完結を表しえない場合があることを述べたが、聴覚を表す知覚動詞においては、これとは逆に doing 形が完結を表しうると考えられる場合がある。do 形が完結を表しえない場合も含めて、聴覚動詞の場合における問題点を述べてみたい。

(4) a. A voice on a loudspeaker was calling out the departing buses. He *heard* the voice *say*, "... and Kansas City," and Steve hurried out to the loading platform.

(S. Sheldon, *Morning, Noon & Night*)

b. "I know." Dmitri walked over and stood guard right outside the telephone booth. He *heard* Stanford *saying*, "René? You know why I'm calling... Yes... Yes... You will?... That's wonderful!" (*ibid.*)

c. One night, Kendall *overheard* her father *saying* to a visitor, "My daughter has a face like a horse. She's going to need a lot of money to hook some poor sucker." It was the final straw. The following day, Kendall left Boston and headed for New York. (*ibid.*)

d. *Peter Tager? No! No! No! No!* Leslie snatched up the phone and pressed a number. "Lyle, stop that story! It must not go out! Do you hear me? It—"

Over the phone she *heard* him *say*, "Miss Stewart, the

papers hit the streets half an hour ago. You said. . .”

(S. Sheldon, *The Best Laid Plans*)

完結説によれば、まず、(4a) においては、“. . . and Kansas City” が、聴覚対象の全体ではなく一部しか表していないため、doing 形が予想されるところであるが、do 形が用いられている。他方、(4b, c) においては、引用符中での発話がすべて聞かれたと考えられるので、do 形が用いられると予想されるが、事実は doing 形が用いられている。また、(4d) においては、発話の最後までは聞いていないので、知覚の一部を表す doing 形が用いられると予想されるが、事実は do 形が用いられている。少なくとも、これらの do 形と doing 形の使い分けを、完結説によって一貫して説明するのはきわめてむずかしいと思われる。

1.3. do 形と doing 形の意味の違いが完結と非完結にあるとは思えない例

先の (4) の例では、聴覚の対象は意味内容のある発話の場合であったが、次のような知覚主体が自分の叫び声を聞くといった場合はどうであろうか。

(5) a. Feliks ran full tilt at the end of the ridge. He jumped. He flew through the air. He *heard* his own voice, as if distantly, *screaming*. (K. Follett, *The Man from St. Petersburg*)

b. Judy *heard* herself *scream* as the car flew off the edge.

(K. Follett, *The Hammer of Eden*)

完結説では screaming が叫び声の一部を聞いたことを表し、scream は叫び声のすべてを聞いたことになる。しかし、知覚主体が自分の叫び声の全てを聞くことと一部を聞くことの区別をするといったことははたしてあり

うることだろうか。

次の例にも同じような問題があると思われる。

(6) a. In the rearview mirror he *saw* Honeymoon *try* to wave down a passing car. It drove right by. He tried again. No one would stop. (*ibid.*)

b. He heard shots. Looking up, he *saw* the surviving Russians *trying* to escape from the tanks, and the guerrillas picking them off as they emerged. (K. Follett, *Lie down with Lions*)

(7) a. As he followed the sendero to where his car was parked, he *saw* Star *begin* to pace up and down, impatient and anxious. (K. Follett, *The Hammer of Eden*)

b. "She has taken my child and left me. She has gone whoring after the American." "I know," said Abdullah, and Jean-Pierre *could see* him *beginning* to swell with righteous indignation. (K. Follett, *Lie down with Lions*)

そもそも動作の「試み」や「開始」そのものを意味する try や begin に、完結、非完結の意味の違いを見出すことは可能だろうか。仮に可能であるとしても、はたして有意義な意味の違いとはなりうるだろうか。結局、(5) の scream の例と同様、try, begin といった動詞の do 形と doing 形における使い分けは、完結と非完結にあるとは思えず、完結説への疑問を投げかけることになると思われる。

1.4. do 形、doing 形のどちらか一方しか生じることのできない場合

1.4.1. doing 形をとることのできない例

知覚構文には、do 形と doing 形のどちらか一方しか生じることのでき

ない例があるが、まず、doing 形をとることのできない例からみていくことにしよう。

(8) a. I heard him fire a shot.
b. * I heard him firing a shot. (Declerck 1991: 489)

Declerck は (8b) については、'nonprogressive because the reference is to a single punctual situation' としている。同じようなことは多くの文法書でもふれられているが、Alexander では次のように述べられている。

(9) Either the bare infinitive or *-ing* can describe a short action:
I heard someone unlock the door / unlocking the door.
But we do not use the *-ing* form for *very* short actions. Compare:
I heard him cough. (once)/ *I can hear him coughing.* (repeatedly) (Alexander 1988: 302)

Declerck のいう 'a single punctual situation' と Alexander のいう 'very short actions' は同じことを述べていると思われるが、ではなぜ補文の事態が 'a single punctual situation' あるいは 'very short actions' であるときは、do 形しかとることができないのだろうか。この問いに対しては、「瞬時の出来事を輪切りにしてその一部を聞くことはできない」(安井 1997: 11) という完結説の立場からの答えがある。この説明には一見うなずけるところがあるような反面、問題がないわけではない。例えば、次の例における feel の感覚はほとんど瞬時に湧き起こった感覚であるようにも思えるが、なぜこの場合には、輪切りの形である doing 形が可能なのだろうか。

(10) a. "You worked with Dennis Tibble." Ashley *felt* the fear *beginning* to rise again. (S. Sheldon, *Tell Me Your Dreams*)

b. "Give that agent a gold star!" Judy *felt* her energy *returning*. (K. Follett, *The Hammer of Eden*)

そもそも、do 形であれ doing 形であれ、これらの選択は知覚対象を知覚した最初の段階で決められるのであり、たとえ、doing 形の場合であっても、この決定の選択に、知覚の途中での切断を意味する輪切りの概念が関わっているとは思えない。いずれにせよ、安井の「輪切り説」は十分説得力のあるものとも思えず、なぜ、瞬時的な事象であれば doing 形がとれないのかについてのより納得のいく説明が求められると思われる。

1.4.2. do 形をとることのできない例

次の例はこれとは逆に do 形をとることのできない例である。

(11) We { observed / perceived / noticed / spotted / beheld / witnessed / found / studied } { Raquel Welch taking a bath. / * Raquel Welch take a bath. }

(Akmajian 1977: 441)

Akmajian はこのようなふるまいの理由については考察していないが、なぜこのようなふるまいをするのかの理由については、すでに、Vendler (1967) が spot の例を持ち出して次のような説明を与えている。

(12)　I spotted him crossing the street.

*I spotted him cross the street.

Our time schemata explain this difference. Spotting (an achievement) connotes a unique and indivisible time instant. Now running or crossing the street are processes going on in time (the latter also takes time) and as such cannot be broken down into indivisible time instants: their very notion indicates a time stretch. Thus there is a logical difficulty in spotting somebody run or cross the street.

(Vendler 1967: 114)

このVendlerの説明は、完結説の原理に基づく知覚する時間と知覚される事象の時間との間の時間的整合性による説明ということができる。確かに、spotについては、Vendlerの説明はあてはまるようにも思えるが、(11)のすべての動詞にあてはまるわけではない。なぜなら、observeやstudyはある程度持続のある知覚を表すため、時間的整合性の考えによれば、do形がとれることが予測されることになるが、事実は(11)の例が示すように、そうはならないという問題点があるからである。

安井は、このVendlerの時間的整合性による考えを次の文の容認性の説明にも適用している。

(13)　a. *I see a bird cross the street.

b.　I see a bird crossing the street.　(安井 1997: 10)

(13a)の非文の理由について安井(1997: 10)は、「seeの現在時制は、瞬間知覚であった。よって、(29a)[=(13a)]が容認不可能であるのは、瞬間知覚、すなわち、「見つける」という行為によって、鳥が通りを渡り始

めるところから渡り終わるまでの一部始終を目撃することはできないので、主節の時間と補文の時間が矛盾し整合しないからである。」としている。一方、doing 形の（13b）が容認されることについては、「(29b)[=(13b)] の意味が、瞬間知覚、すなわち、「見つける」という行為によって鳥の道路の横断という出来事の一部を一瞬かいま見るということであり、主節の時間と補文の時間がどちらも瞬間であるので、時間が整合するからである。」としている。

しかし、(13) の容認性をこのような完結説に基づく時間的整合性の観点から説明することにはいくつか問題がある。まず、(13a) が容認されない理由であるが、cross the street が瞬間的でないからとするならば、次の文が容認されないことはどのように説明するのであろうか。

(14) a. *I hear the bell ring.
b. *I hear a door slam.

(14a, b) での知覚対象は瞬時的なもので、hear の瞬間知覚と時間的には整合するはずである。

さらに、see が can see となって知覚の状態を表すとすれば、主節の動詞はある一定の継続した時間を持っているはずであるから、(15a, b) の容認性は (13a, b) の容認性と逆になることが予測されるはずであるが、容認性は (13a, b) と変わらないままである (安井 1997: 11)。

(15) a. *I can see a bird cross the street.
b. I can see a bird crossing the street.

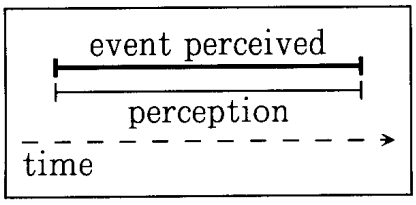
この問題点は、(11) の observe や study が持続を表す知覚でありながら、瞬時的な知覚対象を知覚できないのと同じ現象であると考えられる。

少なくともこれまでのことから、完結説に基づく時間的整合性による考えでは、なぜ doing 形あるいは do 形が生じないのかについて満足のいく説明ができないと結論づけてよいと思われる。

1. 4. 3. Pizer (1994) の temporal subsumption

この時間的整合性の概念をさらにおしすすめたのが Pizer (1994) である。まず、Pizer は do 形が用いられる bare infinitive complement (IC) においては、知覚行為と知覚される出来事の始めと終わりは重ならなければならないという従来の時間的整合性の考えを受け入れ、これを、図(16) のように表している。

(16) V+IC construction (ex, I saw the ship sink)



そして、次のように説明している。

(17) a. *Kim glimpsed the thief sneak through the window.

b. Kim glimpsed the thief sneaking through the window.

On this account, a sentence like (16a)[=(17a)] above is ruled out because the lexical semantics of the verb *glimpse* include the idea that perception is basically punctual. If sneaking through a window takes any time at all, then it will necessarily take longer than the act of *glimpsing*. The combination of *glimpse* with a bare infinitival complement is unacceptable because the resulting combination does not

correspond to the meaning of the V+ IC construction as it is represented in (19a)[=(16)]. (Pizer 1994: 342)

ここまでは、Vendler の時間的整合性による説明と同じだが[2]、彼女が問題にしたのは、次の文の容認性の違いである。

(18) ??I glimpsed him snap his fingers. (*ibid.*)

(19) a. *I noticed Pat leave the lecture early.

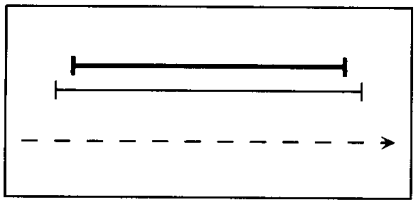
b. ? While I was talking to Paul, I noticed the top button on his shirt suddenly pop.

c. Here comes Smith! Now notice him run past those linebackers!

d. ??I noticed him run past those linebackers. (*ibid.*: 343)

すなわち、時間的整合性の考えによれば、知覚対象が瞬時の出来事であれば、主節の瞬時的な知覚と時間的には整合することになり、(18) や (19b) は完全に容認されるはずであるがそのようにはならない。この問題について、彼女が注目したのは、(18) や (19b) に比べて、(19c) が完全に容認されるという事実である。このことを説明するために彼女が提案したのが、'the end points of the event perceived must be inside the temporal span of the perception as schematized in (21)[=(20)]' (Pizer 1994: 343) という図(20) の temporal subsumption の概念である。

(20) Proposed view of V+IC temporal relations



このように考えることによって、なぜ、(19c) が容認されるのかが説明できるとした。なぜなら、この場合スポーツアナウンサーは、知覚対象となる事象を前もって知ることができ、知覚する時間が知覚される出来事の時間より長くなり、よって (20) の条件を満たすことになるからである。

しかし、この考えはとうてい受け入れることのできないものである。そもそも一般的な知覚構文の場合、temporal subsumption はあてはまらないのが普通である。例えば、先の (2a) の例は、「振り向くとある事態が目に入った」という意味であり、知覚される事態がすでに生じていたとする解釈においては、知覚対象は知覚する時間の枠をはみだしており、temporal subsumption の制約には従わないことになる。もしこの制約がすべての do 形にあてはまらなければならないとすると、逆にこれまで、なんら問題ないとされてきた文が容認されなくなってしまおう。知覚対象が知覚する時間の枠内に入る (19c) のような場合はむしろまれなケースなのである。Pizer はきわめてまれな (19c) の容認性を説明するために (20) の制約を設けたことになる。

結局、Pizer が temporal subsumption を提案するために例としてあげているのはこの例だけであり、これはきわめて ad hoc な制約であり、一般性は持ちえないものとすべきである。それより、説明されるべきは、なぜ、(17a) と (19a) に比べて (18) と (19b) の容認性が多少なりともよくなっているのかということである。Pizer では時間的整合性の観点から説明しているが、すでに述べたように、時間的整合性による説明には根本的な問題があるのであり、別な観点からの説明が求められる。

また、Pizer は、smell や taste も do 形をとらないことについてふれている。

(21) a. You can taste the ginger in this soup prickling your tongue.
?? b. You can taste the ginger in this soup prickle your tongue.

c. Paul smelled the toaster burning his poptarts.

?? d. Paul smelled the toaster burn his poptarts. (*ibid.*: 336)

このことについては、taste や smell といった種類の知覚が 'they refer to sensory modalities that are not sufficiently fine grained' (*ibid.*: 344) であるとして、時間的整合性とは別個の問題であるとしている。しかし、(21) の例を、視覚や聴覚といった他の知覚動詞と同じように扱えないこと自体、Pizer の説の欠陥を示すものであるといえる。逆に、もしこの場合についても、他の do 形がとれない例と同じように扱うことができるとすれば、その理論は do 形と doing 形の使い分けについてのより幅広い一般化を捉えたことになると思われる。

2. 純粋知覚と認識的知覚

少なくともこれまで述べてきたことから、完結説のいくつかの問題点、すなわち、do 形が出来事全体を表しえない場合や、逆に doing 形が出来事の全体を表しうると考えられる場合があり、また do 形と doing 形のどちらか一方しか生じることができない構文で、なぜ他方の形が生じえないのかを説明できない、といったような問題点が明らかになったと思われるが、このこと以上に完結説にはさらなる問題点があると思われる。それは、実際のコンテクストにおいてはどのような場合に do 形を用い、どのような場合に doing 形を用いるのかという問いに対する答えは完結説からは出てこないということである。ここに完結説の限界があると思われる。つまり、実際のコンテクストでは、do 形か doing 形かのどちらかよりふさわしいほうが用いられているのであるが、どちらの形が用いられるのかということについての、コンテクストを考慮に入れた考察はこれまでほとんどなされてこなかったのである[3]。

この実際の用例の検討にこそ、完結説とは異なった新たな展望が開けて

くると思われるのであるが、ここで、手がかりとなるのは進行形としての doing 形の性質である。従来、知覚構文における目的語の後の do 形と doing 形は、それぞれ、単純形と進行形に対応すると指摘されてきたが、この進行形の特質にこそ、この問題の解明への手掛かりがあると思われる。

本稿の見地にとって参考になると思えるのは、進行形に対する近年の認識論的アプローチであるが、中でも、山岡 (1997) の見解は非常に有益である。山岡が考察したのは、次のような例における進行形の働きである。

(22) He knocked and waited. Several moments later the door was opened by Mrs.Robinson. She was wearing a green housecoat. Benjamin stood looking at her, glanced over her shoulder into the house, then looked back at her face.

—C. Webb, *The Graduate*

従来このような状態動詞の進行形についてはすべて、「一時性」を表すとして扱われてきた。しかし、山岡 (1997: 27) はこの例について、「この場合、進行形を含む文では、Robinson 夫人がドアを開けた時の、登場人物Heの目から見ている状況が描かれている。これは、進行形を含む文の後の文 (Benjamin stood looking at her) から分かる。He は、戸口にいる Robinson 夫人をじっと見つめ、彼女の服装を観察している。この場合、進行形には、He が戸口にいる Robinson 夫人の服装を凝視している意識を読み取ることができる。」と述べ、さらに、もしこれが単純形の wore であるとしたら、「凝視・知覚しているという意識は感知できず、登場人物のある人物についての単なる服装描写を行うことである」としている。そしてこの進行形の用法については、「進行形においては、そのコンテクストにおける語用論的理由により、話し手 (あるいは登場人物) は主語の人物・事物の状態に心理的関与があり、その対象に向けている意識の集中

が反映されている。一方、単純形においては、その対象に対する心理的関与はなく、客観的スタンスが反映されている。進行形か単純形かの選択は、この心理的関与の仕方の違いによる」(山岡 1997: 33) と一般化している。ここで重要であると思えるのは、「意識の集中」と「心理的関与」の概念である。山岡の考察はもっぱら、状態動詞の進行形についてであったが、山岡自身、このような進行形の特徴は非状態動詞にもあてはまるとしている。

この進行形の使用原理と同じことが、今問題にしている知覚構文にも適用できると考えられないだろうか。この場合、進行形における、登場人物あるいは話し手に相当するのが知覚主体である。つまり、知覚主体が、知覚対象に何らかの心理的関わりを持つ場合、例えば、知覚対象が注目に値する情報、驚くべき内容といった、知覚主体に何らかの心理的影響を及ぼしうるような情報を含んでいる場合は doing 形を用い、これに対し、知覚対象をただ単に客観的に知覚するがままに捉えたのが do 形であると考えることは十分可能であると思われる。つまり、do 形か doing 形かは、全体を知覚したか一部を知覚したかといった知覚された量の違いを表しているのではなく、知覚対象を単なる知覚として捉えたのかそれとも意味ある知覚として捉えたのかという、知覚主体の知覚対象に対する心的態度の違いの反映なのであり、これは知覚の質の違いなのである。

以下、本稿では、do 形の表す知覚を「純粋知覚」、doing 形の表す知覚を「認識的知覚」ということにする。よって次のようにまとめられよう。

(23) a. do 形「純粋知覚」－何ら心理的関わりを見出しえない知覚対象に対する知覚主体のありのままの知覚を表す。

b. doing 形「認識的知覚」－何らかの心理的な関わりを見出した知覚対象に対する知覚主体の瞬時の認識を表す。

知覚主体が知覚対象に見出す意味づけはあくまで主観的なものであるという観点からは、「純粋知覚」は「客観的知覚」「物理的知覚」であり、「認識的知覚」は「主観的知覚」「心理的知覚」であると捉えることも可能かもしれない[4]。

以下、「純粋知覚」と「認識的知覚」について具体例を交えながら見ていくことにする。

2.1. 純粋知覚と Akatsuka の仮説

純粋知覚については二つに分けることが可能と思われる。まずは、きわめて瞬時的な知覚で do 形しかとれない場合と、完結説の説明としてよく引き合いに出される、do 形と doing 形のどちらも用いられる場合の do 形の場合であるが、ここでは前者のタイプの例を中心に述べてみたい。

まず、do 形しかとれないタイプであるが、これは、先の (8) のような例である。

(8) a. I heard him fire a shot.
b. *I heard him firing a shot. (Declerck 1991: 489)

これは、Vendler や Alexander が知覚対象が 'a single punctual situation'、'very short actions' の時は do 形しかとれないとした例だが、なぜかについては彼らは述べていない。安井は先に述べたように、doing 形がとれないのは、「瞬時の出来事は輪切りにできない」からだとしたが、この説明は今一つ説得力に欠けたものであった。本稿の観点からは、「輪切りにできない」とは、知覚対象があまりに瞬時であるため認識に至る時間がなく、知覚としてしか把握できない場合であるということになるが、この事象の本質に関わってくると思えるのが、新獲得情報についての Akatsuka の仮説である。

Akatsuka は、'Human, unlike machines which lack the ability to think and feel, do not learn instantaneously; humans need time and experience before they can digest and internalize the acquired information.' (Akatsuka 1985: 638) と述べている。すなわち、新しく獲得したばかりの情報が認識の内部で十分確立した知識となるには時間がかかるのである。Akatsuka が問題にしたのは、もっぱら、物理的な知覚ではなく認識的な情報についてであるが、この仮説は、物理的な知覚についてもあてはまるとするのが本稿の立場である。まず、知覚対象は、物理的な知覚による「純粋知覚」によって受け止められるが、この段階では外界を知覚するがままに受け止めただけにすぎない。この段階が do 形なのであるが、これはいってみれば、ビデオで客観的に記録された事態ともいうべきもので、それ自体には何の意味づけも与えられていない。こののち、知覚対象が知覚主体にとって何らかの心理的関与があるとみなされた場合、つまり、知覚主体が知覚対象に何らかの意味づけを与えた場合が、doing 形の「認識段階」への移行である。しかし、この認識段階への移行のためには、ある程度の知覚される時間が必要なのである。よって、知覚対象が瞬時に消えるような場合には、もっぱら反射的な知覚でしか把握できない。これが、瞬時的な事象については do 形でしか知覚できない理由と考えられる[5]。

次がこのような例と考えられよう。これらにおいては、doing 形は生じることができない。

(24) a. Ashley *heard* the train *whistle* in the distance.
(S. Sheldon, *Tell Me Your Dreams*)

b. She *heard* a match *scrape*; then a candle flickered in the corner. (K. Follett, *Lie down with Lions*)

また、次の例においては知覚対象は上の例のように瞬時に消滅するものではないが、do 形が用いられている。

(25) And I ran in the bedroom. I jumped on top of her, and I *saw* the roof *blow off*. (ABC World News Tonight, '98/4/16)

この例は、竜巻であっという間に屋根が吹き飛ばされたという突発的な状況を表しているが、ここでの do 形は事態があまりに急なために、ただただ受動的に知覚としてしか捉えられない状況を表していると考えられる。この場合、屋根が飛んでいくのを最初から見たか途中から見たか、あるいは全部を見たか一部を見たかといったことは、なんら do 形の選択には関わっていないのである。よって、このような、do 形しかとれない、知覚主体の認識が介在しえない知覚の本質はあくまで、反射的な純粋知覚にあるのであり、これらの do 形の本質を完結説のいう「完結」を表すと捉えることはほとんど意味がないといえよう。

次の例も同様に考えられる[6]。

(26) There was even more terror aboard the 58-m fishing boat, on a training voyage with students from Uwajima Fisheries High School in southwest Japan. "I *saw* something *come up*, and I thought it was a whale," crew member Hideo Okayama said. "All I heard was someone screaming, 'Danger! Danger!'"
(*Time*, February 26th, 2001)

この例においても、come up は突然視界に入ってくるものを知覚としてとらえた瞬時的な状況を表していると考えられる。

ここで、1.4.3. 節であげた Pizer の例を見直して見ることにしたい。

(17) a. * Kim glimpsed the thief sneak through the window.

b. Kim glimpsed the thief sneaking through the window.

(18) ??I glimpsed him snap his fingers.

(19) a. * I noticed Pat leave the lecture early.

b. ? While I was talking to Paul, I noticed the top button on his shirt suddenly pop.

c. Here comes Smith! Now notice him run past those linebackers!

d. ??I noticed him run past those linebackers.

ここで問題となるのは、(17a) と (19a) に比べ (18) と (19b) の容認性があがっているのはなぜかということであるが、これは、Pizer が言うように、時間的整合性が改善されたからではなく、snap his fingers や pop といった事象がそもそもあまりに瞬時で、「純粋知覚」の do 形としてしか捉えられない性質のためであるということになる。しかし、なぜ、(18) と (19b) が完全には容認されないのかといえば、glimpse, notice といった知覚動詞の意味内容が認識的な知覚を表すタイプであり、瞬時的な事象を知覚するのにはふさわしくないためであると考えられる。また、glimpse の容認性が notice より低いのは、認識的な意味あいがより強いためと考えられよう。

では (19c) が完全に容認されるのはなぜであろうか。これは、(19c) がいわば次の (27) のような、スポーツの実況における眼前の進行する事態を知覚するままに述べる感嘆文の用法になっているためと考えられる[7]。

(27) Napier passes the ball to Attwater, who heads it straight into the goal! (Leech 1987: 6)

(27) の現在時制の用法について、Leech (1987: 6) は、'It signifies an event simultaneous with the present movement' と述べているが、これは、まさに今問題にしている、do 形の pure perception の用法そのものともいえる。つまり、(19c) が容認されるのは、Pizer のいう temporal subsumption の制約に従っているためではなく、この文が感嘆文の特徴を兼ね備えているためということになろう。ちなみに、感嘆文には、How fast he runs/ * is running! のように進行形とは共起しないという特徴があるが[8]、これは、感嘆という心的態度は、do 形のもつ純粋知覚という心的態度とは矛盾しないが、doing 形のもつ認識という心的態度とは相容れないためである。

ここで、先に述べた、do 形が生じている聴覚を表す知覚動詞の (4a, d) の例を見てみよう。

(4) a. A voice on a loudspeaker was calling out the departing buses. He *heard* the voice *say*, "... and Kansas City," and Steve hurried out to the loading platform.

(S. Sheldon, *Morning, Noon & Night*)

d. *Peter Tager? No! No! No! No!* Leslie snatched up the phone and pressed a number. "Lyle, stop that story! It must not go out! Do you hear me? It—"

Over the phone she *heard* him *say*, "Miss Stewart, the papers hit the streets half an hour ago. You said..."

(S. Sheldon, *The Best Laid Plans*)

すでに述べたように、これらの do 形は知覚対象の完結を表してはいない。では、これらの例はどのように説明されるのだろうか。まず、(4a) についてであるが、Kansas City という情報は知覚主体が関わりのある情報と

も考えられるが、ここでのふさわしい状況は、Kansas City という都市名がたまたま耳に入ってきたという状況であると思われる。つまり、ここでの do 形は、単なる知覚として受け止めたことを表していると思われる。

では、(4d) の do 形はどう説明されるだろうか。ここでの状況は、新聞社主である Stewart が部下に印刷の停止を急遽命じるも時すでに遅く、印刷された新聞がもうすでに巷に出回っているという決定的な内容を聞かされた場面である。ここでの Stewart での心理状態は、耳にしたばかりの情報がきわめてショッキングなものであるため、その内容をすぐには消化できない状況にあると考えられる。つまり、ここでの do 形は、決定的な情報が認識としてではなく、とりあえず知覚として耳に入ったことを表しているのである。よって、知覚主体にとって信じたくない情報がとりあえず耳をよぎったといったニュアンスが伝わってこよう。

結局これらの do 形は、知覚対象の全体を表す場合であれ一部しか表さない場合であれ、純粋知覚を表すという一般化で捉えることが可能となる。とはいえ、do 形が完結を表すとする従来の完結説がかなりの一般化を捉えていることもまた事実であると思われる。しかし、これはあくまで、「純粋知覚」という知覚の性質の必然的帰結であると考えられる。do 形があるがままの知覚を表すとすれば、それは当然、先の (3) におけるような知覚の途中での何らかのアクシデントがない限り、出来事の終わりまでの全体を知覚することが普通であると思われるからである。

しかし、知覚対象を知覚として捉えることは、知覚される事態のすべてを知覚する必要はない。完結の意味はあくまで文脈による含意にすぎないとすべきである。

(28) a. ?I saw him cross the street, but he got hit by a truck in the middle of the road.

b. I saw him crossing the street, but he got hit by a truck in

the middle of the road. (Pizer 1994: 338)

Pizer は、通説に従い、(28a) の容認性が劣るのは、do 形は始まりも終わりも持つ event を表すが、but 以下がこのことと矛盾するからであるとしている。しかし、次の (29) は何ら矛盾のないものである。

(29) I was watching him cross the street, but he got hit by a truck in the middle of the road.

結局 (28a) のような文が一見、do 形が完結を表しているように見えるのは、これが単純過去で書かれているためであり、do 形そのものに完結の意味はないといえる。

2.2. 認識的知覚

これまで問題とされた例も含めて、本稿での認識的知覚の観点からいくつか例を見ていくことにしたい。まず、先にあげた (13) の例である。

(13) a. *I see a bird cross the street.
b. I see a bird crossing the street. (安井 1997: 10)

この容認性についての完結説の立場からの安井の説明は、今一つ説得力を欠いていたと思われる。では、本稿の観点からはどのように説明されるのかということになるが、I see という表現そのものに、(13a) の非文の理由が潜んでいるということになる。つまり、話し手が、鳥が通りを横切るのを目撃した光景を瞬時に言うなら、"Look! A bird (is) crossing the street." のような、I see のない表現が普通であり、現在時制の I see があえて用いられるとすれば、それは、「今、自分は見ている」との意識的、

認識的知覚の表明に他ならず、よって、doing 形の crossing が用いられることになると説明できよう。

では次に、先の例文（11）が、do 形をとれないのはなぜかということになるがこれは、これらの動詞が、知覚の他に、認識的意味を兼ね備えた「認識的知覚」を表す述語であるということから説明できると思われる。

(11) We { observed / perceived / noticed / spotted / beheld / witnessed / found / studied } { Raquel Welch taking a bath. / * Raquel Welch take a bath. }

(Akmajian 1977: 441)

smell や taste の述語が do 形をとれないことについても同じように説明できる。Pizer はこれらの述語について、'they refer to sensory modalities that are not sufficiently fine grained' といったが、このことは、この種の知覚はその性質上、視覚や聴覚の場合と比べ、より意識的知覚が求められることであると解されよう。

次は認識的知覚を表している具体例である。

(30) Then the man was gone. Walden *heard* his footsteps *running down* the corridor. Walden made for the door. The other three were ahead of him. Out in the corridor, the detectives knelt on the floor, aiming their guns. Walden *saw* the killer *running away* with a queer fluid step, his left arm hanging straight

down by his side, holding the bottle as steady as possible while he ran. (K. Follett, *The Man from St. Petersburg*)

(30) は、知覚主体たる Walden が犯人を追いかけている場面である。それゆえ知覚対象には心理的関与があり、意識を集中して知覚する doing 形がふさわしいといえる。また、逆にここでの doing 形から知覚主体の心的態度を知ることができるともいえる。従来の完結説では doing 形は走っている途中を表すという分析だけであり、逆に、ではなぜこの場面で走っている全体でなくて途中を見たのかという考察はこれまでなされてこなかったのである。

ここで、先に問題にした（4b, c）の doing 形の例を見てみよう。

(4) b. "I know." Dmitri walked over and stood guard right outside the telephone booth. He *heard* Stanford *saying*, "René? You know why I'm calling... Yes... Yes... You will?... That's wonderful!" (S. Sheldon, *Morning, Noon & Night*)

c. One night, Kendall *overheard* her father *saying* to a visitor, "My daughter has a face like a horse. She's going to need a lot of money to hook some poor sucker." It was the final straw. The following day, Kendall left Boston and headed for New York. (*ibid.*)

まず（4b）についてであるが、saying が用いられているのは、その聞いた意味内容そのものを問題にしているためである。この文の前にある、Dmitri walked over and stood guard right outside the telephone booth. の個所から、問題の発話を意識的に、いわば、聞くべくして聞いたことがわかる。(4c) においても、doing 形が用いられているのは、単なる知覚

としてではなく、自分に直接に関わりのある情報として聞いたためである。

このような聴覚における doing 形は知覚の最初の段階で瞬時に選択されるのであるが、この聴覚の場合においては、認識的知覚様式は最後まで持続されることになる。ここに、同じ認識的知覚であっても、視覚や単なる音に対する聴覚の場合と、意味内容のある発話を聞く場合の聴覚との大きな違いがあるといえよう。つまり、視覚や単なる音に対する聴覚の場合は、知覚対象が等質なために、どの時間で知覚されても知覚される内容が同じであるために、認識として捉えられた時は瞬時の知覚情報で十分なのであり、最初に知覚された情報がすべてなのである。doing 形は瞬時の知覚を表すとよく言われるのはこのためである。また、瞬時の認識的知覚であれば、知覚対象は必然的帰結として瞬時の知覚対象である出来事の一部を表すということにもなろう。

しかし、ここで問題にしている発話の理解においては、時の経過と共に知覚される意味内容も異なっていくため瞬時の聴覚では十分でありえず、認識的知覚様式が最後まで持続されることになり、結果的に知覚対象の完結を表すことになるのである。これは特殊な例といえるかもしれないが、結果的には、この場合の doing 形は完結を表すことになるのであり、doing 形は出来事の一部を表すとする完結説への反例となろう。本稿の考え方では、doing 形は認識的知覚を表すが、その知覚対象は出来事の一部である場合もあれば、出来事全体である場合もあるということになる。

3. 具体例の検討 —— do 形と doing 形の比較 ——

ここでは、disappear と appear という 2 つの補文動詞において、それぞれの do 形と doing 形が用いられている例を比較することによって、コンテクストからその使い分けの要因をさぐってみることにする。まずは、disappear と disappearing の比較である。

(31) a. He could see the coach drawn up to the imposing entrance to a large house. Over the roof of the coach he *saw* two top hats, one black and one gray, *disappear* into the building. Then the door closed, and he could see no more.

(K. Follett, *The Man from St. Petersburg*)

b. Her footsteps made no noise on the carpet. She reached the top of the staircase and looked along the corridor. She *saw* Charlotte *disappearing* into the old nursery. She was about to call out, then stopped herself. (*ibid.*)

まず、do 形の disappear が用いられている（31a）であるが、ここでは、知覚主体は知覚対象に心理的関与は見出さず、よって、知覚するがままの出来事が do 形で述べられている。一方、(31b) の状況設定は、母親である彼女が、娘の Charlotte の部屋に行こうとしたところ、てっきり、自分の部屋にいるとばかり思っていた娘が、今は使用されていない子供部屋に入っていくのを偶然目撃し驚いた場面である。ここでは、問題の知覚構文に続く She was about to call out. の文が彼女の驚きを表していよう。驚きは心理的関与の表れそのものに他ならない。

次の例は、approach と approaching の例である。

(32) a. As the passengers descended from the plane, Lonergan *saw* Peter Tager *approach* an attractive blonde in her forties and greet her. (S. Sheldon, *The Best Laid Plans*)

b. In the distance, he *heard* a large speedboat *approaching*. *They shouldn't allow power boats on the lake. They'll scare all the fish away*. The speedboat was bearing down on him. (*ibid.*)

まず、(32a) では、知覚主体と知覚対象は何ら関わり合いがなく、知覚主体は単なる知覚として補文の出来事を捉えていて、do 形が用いられている。一方 (32b) は釣りをしている知覚主体が、ボートが近づいてくるのを耳にした場面である。釣りをする者にとって、ボートは大いに心理的な関わりのある対象となる。*They shouldn't...* では内面の感情が示されている。感情も心理的関与の表れそのものであり、doing 形の使用が説明できる。

ここで、先の1.3.節で問題にした、「do 形と doing 形の意味の違いが完結・非完結にあるとは思えない例」の使い分けを見てみることにしよう。まずは (5a, b) で、これはどちらも、自分で自分の叫び声を聞くというシチュエイションである。

(5) a. Feliks ran full tilt at the end of the ridge. He jumped. He flew through the air. He *heard* his own voice, as if distantly, *screaming*. (K. Follett, *The Man from St. Petersburg*)

b. Judy *heard* herself *scream* as the car flew off the edge.
(K. Follett, *The Hammer of Eden*)

(5a) は警官に追いかけられている Feliks が屋根から屋根に決死の覚悟で飛び越える場面である。つまり、自分でこれからとるべき行動がどれほど危険なものであるかを知っているのである。そのような場合においては、自分で発する叫び声を意識して聞くことは可能であり、自分の叫び声を聞きながら飛び越えたといったニュアンスがこの文には感じられる。一方、(5b) は、Judy が驚くべき光景をみて見て、思わずひとりでに叫び声がでたというシチュエイションであり、我知らず叫んだ声が聞こえてきたという純粋に知覚として捉えたニュアンスが伝わってくると思われる。

次に (6a, b) を見てみよう。

(6) a. In the rearview mirror he (Priest) *saw* Honeymoon *try* to wave down a passing car. It drove right by. He tried again. No one would stop. (*ibid.*)

b. He (Ellis) heard shots. Looking up, he *saw* the surviving Russians *trying* to escape from the tanks, and the guerrillas picking them off as they emerged.

(K. Follett, *Lie down with Lions*)

(6a) は、高速道路の真ん中で車から降ろされた Honeymoon が通り過ぎる車を止めようと手を振って合図する様子を Priest がバックミラーで見ているという場面であるが、ここでの Honeymoon の行動は予想外のものではなく、まさに Priest が予期していた通りの行動であり、Priest がバックミラーに映る光景を傍観者的に知覚するままに見ているといったニュアンスが伝わってくる。(6b) は、ゲリラ側に属する Ellis が、生き残ったソ連軍兵士が戦車から逃げようとする光景が目に入ったという場面であるが、彼がゲリラ側に属する人間であることがわかれば、目に入ってきた光景は十分に心理的に関わりのあるものであり、傍観者的な知覚ではなく意識を集中しての知覚が感じられる。

最後に (7) の例を見てみることにしよう。

(7) a. As he (Priest) followed the sendero to where his car was parked, he *saw* Star *begin* to pace up and down, impatient and anxious. (K. Follett, *The Hammer of Eden*)

b. "She has taken my child and left me. She has gone whoring after the American." "I know," said Abdullah, and Jean-Pierre *could see* him *beginning* to swell with righteous indignation. (K. Follett, *Lie down with Lions*)

(7a) は、Priest が彼の愛人である Star が行ったり来たりし始めるのが目に入ってきたという場面であるが、この光景は、Priest にとっては、何ら心理的に関わりのある状況ではありえず、知覚に入って来た光景をそのまま客観的に述べるというシチュエイションがふさわしく、do 形が用いられているといえる。一方、(7b) は、Jean-Pierre がなんとか Abdullah の歓心を買おうとして、相手の同情を引きそうなことを言っている場面であるが、この場面での Jean-Pierre の最大の関心事は、自分の作り話に Abdullah が興味を示すかどうかなのである。それ故、Abdullah が興味を示し始めるのを見た瞬間は決定的なものであり、意味ある知覚としての doing 形で捉えるのが自然ということになる。

これまで述べてきた例は、コンテクストから知覚主体の心的態度がある程度予想しやすいものであったが、どちらの心的態度も可能でありうるコンテクストがあることはいうまでもないことである。もっとも、そのような場合においては、逆に、do 形が用いられているか doing 形が用いられているかによって、主人公たる知覚主体が知覚対象をどのように捉えているのかが理解できる。つまり、本稿のアプローチは、知覚主体の知覚対象に対する心理状態のより深い理解を可能にするものといえる。

これに対し、do 形と doing 形の違いを単に「完結」・「非完結」とする従来の完結説では、このような知覚主体の心理状態へのアプローチはむずかしいと思われる。

5. 補文が状態動詞の場合

最後に、次のように補文の動詞が状態動詞であれば、なぜ do 形が生じないのかを考えてみよう。

(33) We saw John looking (＊look) pretty sick.

(Akmajian 1977: 440)

この事実は本稿の立場からはどのように説明できるのかいうことになるが、(33) のような状態動詞が表れる補文については、知覚としてではなく認識として捉えられるからであるということになる。つまり、時と共に事態が進行する出来事の場合においては、純粋な知覚として捉えられるが、状態動詞の場合においては、補文命題はいってみれば真偽値のある事実を表すものであり、事実というものは純粋な知覚としてではなく認識的に知覚され、よってこの場合の see は notice のような認識的な意味を表すことになり、doing 形が用いられることになると考えられる[9]。

一方、完結説による説明では、状態は「完結」ではありえず、よって「非完結」を表す doing 形が用いられるということになるかもしれないが、その一方で、状態を「非完結」としていいのかという問題もあると思われる。そもそも「状態」と「完結」は相容れない概念であるとすべきであり、完結説からの説明にはかなりの無理がでてこよう。よって、完結説ではきわめて不自然な説明しかできない状態動詞の場合についても、本稿の観点からは一貫して説明することが可能になると思われる。

6. まとめ

従来知覚動詞補文の do 形と doing 形は、「完結」と「非完結」を表すとする完結説が定説としてみなされてきたが、その一つの理由として、「完結」・「非完結」の違いが、この構文の代表的な例ともいうべき、I saw her cross/crossing the street. の文にはきれいにあてはまり、この完結説に何ら問題点はないという印象を与えたことがあるかもしれない。

この完結説の問題点は、実際のコンテクストにおいて、どのような場合に do 形がふさわしく、どのような場合に doing 形がふさわしいのかを説明できないということであった。もっとも、完結説の側に立てば、出来事すべてを知覚することがふさわしい場合に do 形を用い、一部を知覚することがふさわしい場合は doing 形を用いると予測できるということになる

かもしれないが、この考え方はきわめて説得力に欠ける。実際のコンテクストにおいて、全体を見ることと一部をみることに有意義な違いがあるとは考えにくく、また実際そのような区別立てがほとんど無意味に思われる例があることも見てきた。

この使い分けに対する本稿の説は、do 形か doing 形かは、知覚主体が知覚対象をどのように捉えるのか、すなわち、単に知覚するままに捉えるのかそれとも、心理的関与のあるものとして捉えるのか、という「知覚」と「認識」の区別によるとするものであった。このように考えることによって do 形と doing 形の使い分けが、ある程度予測のできるものとなり、また、実際の作品において、知覚主体の内面の心的態度についてのより深い理解が可能になったといえる。

もっとも、従来の完結説がかなりの程度の一般性を捉えていたこともまた事実であるが、これは、本稿で述べた純粋知覚と認識的知覚からの必然的帰結というべきものであり、また、完結説ではきわめて不自然な説明しかできない状態動詞の場合についても、本稿の観点からは一貫して説明することが可能であることも示した。

注

＊本稿は、尾野（2001）では紙数に限りがあったためふれることができなかった箇所を中心に論じたものであるが、議論の都合上、尾野(2001)と重複する箇所があることをお断りしておきたい。また、本稿を記すにあたって、インフォーマントとしていつも辛抱強く質問につきあっていただいたRobert McGuire氏に感謝の意を表したい。氏との議論はきわめて有益であった。議論に加わっていただく機会のあった上田先生と木村先生にも感謝の意を表したい。なお、上田先生からは貴重な例文を提供していただいた。また文献の収集については、本学司書の柳橋望さんのお世話になっている。記して感謝の意を表したい。

[1] 文法書の中での唯一の例外は Thomson & Martinet (1986: 240) であり、以下のような記述がある。

The action in the present participle may be either complete or

incomplete: *I saw him changing the wheel* could mean that I watched the whole action or that I saw only part of it.

しかし、彼らの記述はこれだけであり、do 形と doing 形が共に全体を表す時、どのような違いがあるかについては述べられていない。

なお、この邦訳である『実例英文法第4版〔改訂版〕』(江川泰一郎訳注、オックスフォード大学出版局, 1988) で、訳者は〈訳者注〉として、この箇所について、「原著者は「現在分詞は動作の全部にも一部にも使える」と言っているが、「原形不定詞は動作の全部、現在分詞は動作の一部」と割り切って説明する文法家も多い。訳者としても割り切って考えるほうが実際的であると思う。」(江川 1988: 376) と完結説の立場からのコメントをしている。

ちなみに、完結説の立場をとる江川氏の見解は、江川 (1959) (1991[3]) で述べられているが、ここでは、江川 (1959) を取り上げてみたい。

まず、do 形が用いられている次の例と解説をみてみよう。

Now Archimedes, thinking of the question, happened to go out for a bath. When he stepped into the bath, he *saw* the water *rise* higher in the tub. Then he suddenly sprang out of the water, and rushed home through the streets, crying: "Eureka!" ("I have found it!")

「これは誰でも知っているアルキメデスの原理の発見の話で、浴槽にはいって湯がだんだん上って来るのをはじめから (飛び出すまで) ずっと見ていたから、he *saw* the water *rise* higher in the tub となっているのです。もしこれを he *saw* the water *rising* higher in the tub としますと、ちょっと足を入れたら (何かの仕掛けで？) 湯が上ってきたので、飛び出したとなって、話としては少し妙なものになってしまうでしょう。」(江川 1959: 108)

しかし、この箇所は、アルキメデスが、湯が上ってくるのを意識的にではなく無意識に、まさに見るともなしに見ていると、突然アイデアがひらめいたという場面なのであり、よって、ここでは、まさになにげなしに見ているとという純粋な知覚を表す do 形がふさわしい。もっとも、結果的には、ここでの do 形は江川のいう「はじめから (飛び出すまで)」ずっと見ていたという完結を表すともいえるかもしれないが、それは、あくまで、do 形の純粋知覚の行為の継続にすぎず、完結は do 形の本質的な意味ではありえない。

次は doing 形の例と解説である。

It was getting late in the night. His parents began to feel uneasy about their son. At midnight they *heard* Jesper *barking*. "Oh, there is our Halbert!" cried the parents. Father rushed to the door and opened it.

「これは雪の中にたおれた主人の子供の急を救った忠実な犬の話です。雪をおかして病気の母親の薬を取りに出かけた息子の Halbert と犬の Jesper の帰りがおそいので、案じている両親が真夜中に突然 Jesper の鳴き声を聞いたのです。犬の鳴くのをはじめから終りまでずっと聞いていたのではありません。鳴き声の一部を聞きつけたのです。だから they *heard* Jesper *barking* となっています。もし、これが they *heard* Jesper *bark* では、てんで話が間のびしてしまうでしょう。次の Father rushed to the door. . . という表現が、まったく死んでしまうことになります。」(江川 1959: 1119)

この場面では、先のアルキメデスの例とは逆に、不安な両親の心理状態が即座に犬の鳴き声を心理的関与のあるものとして知覚するコンテクストがふさわしいといえる。つまり、この場合の doing 形は、「鳴き声の一部を聞きつけた」ことを表しているのではなく、犬の鳴き声が瞬時に息子の帰宅が遅いのと関連づけられた意味のある鳴き声として知覚されたことを表しているのである。

do 形、doing 形の本質を、江川のいう the whole action と part of the action と捉える完結説では、このような微妙な知覚主体の心理状態と、do 形と doing 形の選択を関連づけることができない。do 形、doing 形の使い分けを知覚主体の知覚対象に対する心的態度の反映と捉えてこそ、コンテクストにおける使い分けの説明が可能になるといえよう。

また、Kirsner & Thompson (1976) は、do 形補文で表される事象は、時間上、有界 (bounded) でなければならないとする有界説 (bounded theory) を提案している。もちろん完結説と有界説は同一のものではないが、本稿であげている完結説の問題点はまた、有界説にもあてはまるものである。

[2] Pizer (1994) と Akmajian (1977) の参考文献には Vendler (1967) はあがっていない。

[3] 大江 (1982) では、具体的な文脈に基づいて、do 形と doing 形の使い分けについて考察しているが、完結説の立場からのため誤った論を展開していると思われる。このことについては、尾野 (2001) を参照されたい。

[4] watch や listen については、see や hear 比べ、意図的な知覚の意味があり、よって、本稿での考えによれば、doing 形しかとれないのではないかという疑問がでてくるかもしれない。しかし、watch の場合についていえば、watch は 'to look at attentively' (*Longman Dictionary of Contemporary English*, 1987) の意味とされるが、この場合の attentively は必ずしも、「認識」を意味しないと思われる。

まず、watch に do 形が用いられた場合であるが、この場合、知覚対象を注意深く見てはいるが、知覚行為自体はあくまで純粋な知覚行為なのではないだろう

か。例えば、飛行機に乗って眼下に見えるワシントンがだんだん見えなくなったという次の例では、知覚主体が知覚対象から何らかの心理的影響を受けるといったことは考えられず、do 形が用いられている。

（i）A flight attendant served him orange juice and coffee. He wrapped himself in a thin blanket, and *watched* the sprawl of D. C. *disappear* below him as the Varig airplane climbed through the clouds. (J. Grisham, *The Testament*)

これに対し、次は doing 形が用いられている例である。

（ii）Dr. Patterson's back was to the main building, so he did not see Ashley and Dr. Keller come out. "Higher!" Katrina screamed. Ashley stopped in the doorway, frozen. She *watched* her father *playing with* the little girl, and time seemed to fragment.
(S. Sheldon, *Tell Me Your Dreams*)

ここでの例は、Ashley が Dr. Patterson（父親）が女の子と遊んでいるのを見て、昔、父親に性的虐待を受けた事を突如思い出す場面であるが、frozen という言葉からわかるように、知覚対象にショックを受けたことが示されている。

（i）のような do 形が用いられる watch の用法の考察においては、「watch の場合、知覚作用の対象として目的語で表される実体の存在が前提となっている。つまり、その目的語は知覚的な働きかけの対象と認識されているため、既存的であるといえる。」とする中右の説（草山 1999: 202）が示唆的である。要するに、このような用法においては、知覚作用の対象はいわば旧情報であるがために、知覚主体が瞬時の知覚において心理的な影響を受ける対象とはなりえないのである。もちろん、watch は do 形 doing 形のどちらもとれるのであるが、実際の用例としては、do 形のほうが、はるかに多いことはこの中右の説から説明できよう。では逆に、（ii）のような、doing 形が生じている例についてはどのように考えればよいであろうか。この（ii）の例についていえば、目的語の her father は、旧情報であり知覚主体に何ら心理的影響を与えるものでないが、補文命題としての 'her father playing with the little girl' は、知覚主体にとっては、新情報であるショッキングな光景であり、doing 形が用いられていると説明できる。

5 ここで問題となるのが先に問題にした(10)の feel の場合である。つまり、なぜ、feel においては瞬間的であっても doing 形の認識として把握できるのかということであるが、これは、see, hear との知覚の性質の違いによるものであると思われる。つまり、see, hear の知覚対象の発生源は知覚主体の外部にあるものであり、あくまで、知覚対象は受動的にしか捉えられない。しかし、feel の場合は、感覚の発生源が知覚主体の内面にあるとも考えられ、一瞬のうちに、認識段階へ

の移行が可能と思われる。もっとも、このことについては、更なる検討を要しよう。

[6] この例文は上田先生からいただいたものである。

[7] 本文の（19c）が可能なのは、notice が「認識」だけではなく、「知覚」の用法も可能なためである。実際 Did you *notice* anyone *leave/leaving* the house?（*Longman Dictionary of Contemporary English,* 1987）は do 形と doing 形が共に容認される文である。

[8] このことについては、尾野（1990）を参照のこと。

[9] ちなみにこの例文は、小西（1980: 1343）では、「ジョンはかなりひどい病気のようだった」と、see を認識的な意味に解釈している。

また、小西（1980: 1341）には、次の記述がある。

> 'see O doing'《通例 can とともに用いる否定文・疑問文で》「Oが...するのを想像する」意（imagine）を表す。doing は状態動詞も可：
> I can't see him ever owning a house.－Palmer
> （彼が家を持っているなんて考えられない。）
> I just can't see myself needing any more drugs.－Akmajian
> （自分がこれ以上薬を必要とするなんてちょっと考えられない。）

しかし、本稿の観点からすれば、imagine の意味は知覚ではなく認識を表すのであり、当然、do 形はとることができず、doing 形しか生じないということになる。

また、田岡（1999）は、find oneself＋C 構文（FOC 構文）の特徴について論じた論文である。田岡はふれていないが、この構文については C が動詞である場合は、doing 形しか生じないという言語事実がある。彼女はこの構文の特徴として、[＋perceptible]、[－intentional]、[＋surprising] の 3 つをあげているが、この 3 つは、まさに本稿で論じた doing 形が生じる認識的知覚の特徴そのものであるともいえる。つまり、この論文は、本稿での「認識的知覚」の特徴について論じた論文という観点から見直すことも可能である。逆に、注 3 で問題にしたような do 形をとる watch の場合は、[＋intentional]、[－surprising] といった意味あいから do 形の使用が説明できるかもしれない。また、田岡は、「読み手が主語の心中に入り込み、事態に気づく瞬間を体験するというのが、FOC 構文の身上である」（田岡 1999: 139）としているが、ここでの「主語」は、もちろん、本稿でいう「知覚主体」である。

例文出典

K. Follett. *The Man from St.Petersburg*. Signet, 1983.

K. Follett. *Lie down with Lions*. Signet, 1986.

K. Follett. *The Hammer of Eden*. Fawcett Books, 1998.

J. Grisham. *The Testament*. Island Books, 1999.

S. Sheldon. *Morning,Noon & Night*. Warner Books, 1995.

S. Sheldon. *The Best Laid Plans*. Warner Books, 1997.

S. Sheldon. *Tell Me Your Dreams*. Warner Books, 1998.

参考文献

Akatsuka, N. 1985. "Conditionals and the Epistemic Scale." *Language* 61, 625-639.

Akmajian, A. 1977. "The Complement Structure of Perception Verbs in Autonomous Syntax Framework." In P. W. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian eds., *Formal Syntax,* 427-460. Academic Press.

Alexander, L. 1988. *Longman English Grammar*. Longman.

Allsop, J. 1983. *Cassell's Students' English Grammar*. Cassell.

Bolinger, D. L. 1974. "Concept and Percept: Two Infinitive Constructions and Their Vicissitudes." *World Papers in Phonetics: Festschrift for Dr.Onishi's Kiju,* 65-91. Tokyo: Phonetics Society of Japan.

Celce-Murcia, M and D. Larsen-Freeman, 1999[2]. *The Grammar Book*. Heinle & Heinle.

Chalker, S. 1984. *Current English Grammar*. Macmillan.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.

江川泰一郎. 1959.『語学的指導の基礎（上）教室英語の文法（英語科ハンドブックス第二巻)』研究社出版.

江川泰一郎. 1991[3].『英文法解説』金子書房.

Kirsner, R. S. and S. A. Thompson. 1976. "The Role of Pragmatic Inference in Semantics: A Study of Sensory Verb Complements in English." *Glossa* 10, 200-240.

小西友七(編). 1980.『英語基本動詞辞典』研究社出版.

草山　学. 1999.「主語と既存性と中間構文」『英語語法文法研究』第 6 号, 199-213.

Leech, G. N. 1987[2]. *Meaning and the English Verb*. Longman.

尾野治彦. 1990.「進行形についての覚え書き－be going to と will の比較に関連して－」『函館英文学』第29号, 15-35.

尾野治彦. 2001.「知覚動詞補文の do 形と doing 形の使い分けについて－「知覚」と「認識」の観点から－」『英語語法文法研究』第 8 号, 98-112. 開拓社.

大江三郎. 1982.『動詞(Ⅰ)(講座・学校英文法の基礎第 4 巻)』研究社出版.

Palmer, F. R. 1974[2]. *The English Verb*. Longman.

Pizer, K. 1994. "Perception Verb Complementation." *Papers from the 30th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 335-346.

Swan, M. 1995[2]. *Practical English Usage*. Oxford University Press.

田岡育恵. 1999.「Find oneself＋C 構文の意味論」『英語語法文法研究』第 6 号, 129-140.

Thomson, A. J. and A. V. Martinet. 1986[4]. *A Practical English Grammar*. Oxford University Press.

Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

山岡　實. 1997.「談話における進行形」『英語語法文法研究』第 4 号, 21-36.

安井　泉. 1997.「英語の知覚動詞 see を考える」『言語文化論集（筑波大学　現代語・現代文化学系)』第44号, 1-25.

Zandvoort, R. W. 1975[7]. *A Handbook of English Grammar*. Maruzen.